

令和元年6月18日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02321

研究課題名(和文)『ロビンソン・クルーソー』の再話に関する比較文学的研究

研究課題名(英文) A Study on the Renditions of Robinson Crusoe from a Viewpoint of Comparative Literature

研究代表者

佐藤 和哉 (Sato, Kazuya)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：00235326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：『ロビンソン・クルーソー』(1719-20年)の日本における受容史の研究には一定の蓄積があるものの、子ども向けに再話されたテキストやその出版については研究が進んでいなかったため、本研究は、日本での「翻訳児童文学」としてのこの作品の受容に着目した。

その結果、明治以来の日本の近代児童文学とその出版というコンテキストのなかで、『赤い鳥』や『少年倶楽部』などに発表された翻訳物語と同じような文体的な特徴やイデオロギーにもとづく再話がなされていることが分かった。また日本の英語教育のなかでもこの作品がさまざまに書き直されて用いられてきたことも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで外国文学研究でも日本文学研究でも等閑視されてきた翻訳児童文学を、近代日本児童文学史のなかにきちんと位置づけて議論した。また、明治以来の世界文学と西洋文化の受容の一形態として、翻訳児童文学は大きな役割を果たしているため、具体的なテキストに即してその受容の様態の一端を明らかにしたことで、日本が世界とどのように関わってきたかを考えるうえで大きな社会的意義を持つと考える。

研究成果の概要(英文)： Although several studies exist on the reception of Robinson Crusoe (1719-20) in Japan, very few have been written on the retold texts of this work specifically designed for children and their publication. Thus, the present study focuses on the translations and renditions of Robinson Crusoe in relation to the development of Japanese children's literature.

It has been found that since the Meiji era Robinson Crusoe has often been adapted for children using language and ideology similar to other translated works published in children's literary magazines. The similarities include the degree of emotionality and sentimentality, as well as the discourses of nationalism and ethnocentrism frequently found in modern children's literature in Japan. Also, the study has made it clear that since the late nineteenth century a number of editions of Robinson Crusoe have been edited as reading material for English learners, with various degrees of complexity of vocabulary and grammar.

研究分野：イギリス文化史、イギリス児童文学

キーワード：再話 翻訳児童文学 ロビンソン・クルーソー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) ダニエル・デフォー(Daniel Defoe, 1660-1731)による『ロビンソン・クルーソー(*Robinson Crusoe, 1719-29*)』(以下、『ロビンソン』とする)は初期の小説として読まれ研究されてきたばかりでなく、子ども向けに書き直されることで、児童文学作品の先駆的作品であるとされてきた。また、後世に多くの冒険物語を生む契機となった作品でもあるので、児童文学史上の意義もきわめて大きい。しかし、多くの児童文学史がこれらの事実と言及する一方で、具体的に、どういう出版社がどういう作家に依頼してどういう版を「子ども向け」として出版してきたのか、などの点に関する実証的な研究は国内外を問わず未だに少ない。とくに、申請者が約20年前に発表した研究以来、本邦ではほとんど行われていなかった。

(2) その延長上に、日本で明治以来、『ロビンソン』が主に子ども向けの読み物として再話されてきたという受容史の問題がある(「再話」とは、翻訳だけでなくさまざまな翻案や書き直しを含む用語である)。しかし、上で述べたイギリスに関する研究状況と同様に、具体的にどのような再話者がどのような再話をし、そのテキスト間の異同がどうであり、その異同はどのような文学的・思想的・教育的根拠によるものかという点についての研究は皆無に等しかった。日本人の近代ヨーロッパ社会観の形成のうえでこの作品が果たした役割は大きいが、このような「大人向け」のテキストの紹介・読解と、「子ども向け」として再話されたテキストの受容との関係も明らかにされていない。

### 2. 研究の目的

(1) 『ロビンソン・クルーソー』(1719年)の受容史を、「児童文学」というジャンルそのものの成立という観点から俯瞰し、18~20世紀において同作品を子ども向けに書き直したテキストを体系的に調査する。

(2) この作品は日本において、その紹介の初期から子ども向けのテキストとしての色彩を強く持っており翻訳児童文学の発展と密接に関わるが、同様にこの観点からの研究はほとんどない。本研究はこの観点から児童文学として再話(翻訳・翻案)されたテキストを体系的に調査する。

(3) 上記2つの調査・研究によって、この作品のイギリスにおける成立時から現代日本にいたるまでの、子ども向けに書き直されたテキスト群の全体像を描く。

### 3. 研究の方法

(1) 18、19世紀における『ロビンソン』の「子ども向け」テキストの収集、同定。イギリスにおいて、そもそもどのような「子ども向け」『ロビンソン』が出版されていたのか、児童図書となっている『ロビンソン』について、マイクロフィルム、画像ファイルなどの形で可能な限り網羅的に収集し、それらのテキスト間の異同を明らかにする。

(2) 同時代のイギリスにおける児童図書の代表的なものをピックアップして、『ロビンソン』とそれらの図書とのインターテクスチュアリティ(間テキスト性)について考察する。

(3) 明治期以来の『ロビンソン』の再話テキストの収集、同定。イギリスにおけるものと同様に、どのような出版社と再話者(訳者、翻案者)によって『ロビンソン』の再話テキストが生み出されたのかを明らかにする。

(4) 明治から戦後までの『ロビンソン』再話テキスト群を精査・解読する。

### 4. 研究成果

(1) オクスフォード大学ボードリアン図書館にて資料収集にあたり、マイクロ資料と原資料の両方を閲覧し、必要に応じて電子ファイル化したものを入手したことにより、19世紀初頭に児童図書出版で重要な位置を占めていた Benjamin Tabart による再話が確認され、イギリス児童文学というジャンルの形成に、『ロビンソン』が果たした役割が一層明らかになった。そのほか、19世紀型チャップブックの印刷出版業者として有名なヨークのケンドリューやバンベリーのラッシャーだけでなく、多くの擬似チャップブックの存在も確認できた。さらに、先行研究を参照しながらテキストを読解することで、19世紀に流行するパントマイムなどにも『ロビンソン』が演目として表れることが確認できた。

(2) 昭和13年に『ロビンソン漂流記』を講談社から出版した南洋一郎が、当初おもな執筆の場としていたのが、同社の子ども向け雑誌『少年倶楽部』であった。同誌に連載されていた、南自身と、そのほかの当時の流行作家による子ども向け作品の読解を通じて、戦前に子ども向け(とくに男子向け)の物語で、主人公に求められていた美点としての勇敢さや力強さ、あるいは国家主義的なイデオロギーに、少なからず南も影響を受けていたことが分かり、その『ロビンソン』再話における文体や、主人公の性格造型にもその影響が及んでいることが判明した。この研究により、『ロビンソン』の受容を、これまでややもすると等閑視されがちであった、日本

の子ども向け商業誌と関連づけることができた。すなわち、南洋一郎の翻案が、昭和初期の少年雑誌の言説空間から強く影響を受けており、立身出世・ナショナリズム・忠孝などのイデオロギーが原作とは無関係に取り込まれている一方、少年と動物の心情的な結びつきを強調するなど、当時の日本における幼少読者に親しみやすくする技巧なども共有されていることが明らかになった。

(3) ヴィクトリア朝期における『ロビンソン・クルーソー』のテキストの読解により、それよりもずっと後のものと思われていた「語り」の構造における変容（具体的には、原作における時系列に沿った語りが、メディアス・イン・レースの手法によって、動的な場面から始まる語りになっていること）が、19世紀前半まで遡れることが確認できた。

(4) 江戸末期以来、日本における『ロビンソン』の翻訳・翻案は200を越えるが、その約三分の二は戦後に刊行され、その大部分は児童向けになっていることから、戦後日本の翻訳児童文学の受容というコンテキストにおいてこの作品を捉え、戦後日本においてイギリス児童文学がどのように受けとめられてきたかと照らし合わせながら、『ロビンソン』の受容について考えた結果、一見したところ無関係のようにも思われる、A・A・ミルン作の『くまのプーさん』（石井桃子訳）などにも、作中に登場するごっこ遊びの「冒険」や「孤島」という形で『ロビンソン』の影響が見られることが明らかになった。

(5) 最終年度は、『ロビンソン・クルーソー』の日本における受容の研究の成果を、英文で発表することに傾注した。これは、共著者・編者・出版社等の都合により、2020年公刊予定の論文集に収められることになっている。

当該研究が中心的に据えるテキストは、申請者がかねてより研究してきた南洋一郎による再話であるが、当研究は、最初に、明治以来の日本の児童文学史のなかに翻訳・再話が果たしてきた役割を概説する。ここで、『イソップ寓話』、『グリム童話』、『不思議の国のアリス』などの本来の子ども向けの作品だけでなく、そもそもは大人向けの小説、メリメやマンスフィールドなどの作品の翻案・再話も雑誌『赤い鳥』などに掲載されていたという点が重要である。当研究はその後、『ロビンソン・クルーソー』受容の歴史を振り返り、19世紀末以来、子どもを対象とした再話がなされていたことを確認した。さらに、池田宣政＝南洋一郎が近代日本の児童文学に占めた地位も検証した。

以上の手続きを踏んだうえで、南による再話テキストの検討を行い、一部は既発表論文の中身を今回の英語論文に活用したが、南が再話にあたって原作が十分な説明をしないで話しを進めている点や、日本の子どものために丁寧に空白を埋めている点などは新しい指摘である。

これまで、日本児童文学史、とくにそれを翻訳との関連で記述した英語文献が極めて少ないことも、今回の論文執筆にあたって資料を渉猟した過程で明らかになり、その点からも当該論文が果たす役割は大きいと思われる。日本における『ロビンソン』の子ども向け再話についての研究を英文で発表することにした点でも、当該研究は国際的にも意義があると言える。

(6) 本研究の一つの派生として、大学における英文学教育／英語教育との接続が挙げられる。2013年に「多読教材としての『ロビンソン・クルーソー』: Graded Readersのテキスト分析」を発表して以来、英語教育における『ロビンソン』にも着目してきた。2016年には、日本英文学会第88回大会シンポジウム「英語力向上と文学教材」において、司会を行うとともに「英文学教育への視聴覚教材の導入についての提言」を講師として発表した。この発表自体は『ジェイン・エア』に関するものであったが、条件を整えば、『ロビンソン』についても文学教育と英語教育を接続させる授業展開が可能であることが示唆された。英語教材としての『ロビンソン』も、日本的なテキスト受容の一形態として注目に値することが示唆され、さらなる研究への糸口となるものと思われる。

(7) また、『ロビンソン』の受容とサブカルチャーとの接続についても検討し、イギリスで発表されたグラフィック・ノベルに関する論文を発表した。これも理論的な関連では、テレビ番組・映画・マンガなど、さまざまなジャンルに展開していった『ロビンソン』を研究するうえでの下地となり、同時に『ロビンソン』の受容に関する研究へと繋がるものであると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計1件)

佐藤和哉、大学の教室で『エセルとアーネスト』を読む  
日本比較文化学会『比較文化研究』、査読有、No.125, 2017, pp.115-126

### 〔学会発表〕(計3件)

佐藤和哉、イギリス児童文学の世界 『アリス』と『プーさん』: ディズニーの向こうにあるもの

(招待講演) 米子市立図書館・図書館友の会・桜楓会講師派遣事業 講演会 (2017年10月1日 米子市立図書館)

佐藤和哉、英文学教育への視聴覚教材の導入についての提言 (シンポジウム「英語力向上と文学教材」)

日本英文学会第88回大会 シンポジウム (2016年5月29日 京都大学)

佐藤和哉、子ども向け翻訳書としての『ロビンソン漂流記』—南洋一郎を中心に—  
第239回「歴史と人間」研究会 (2015年11月14日 一橋大学)

〔図書〕(計1件)

佐藤和哉、日本英文学会(関東支部)(編)『教室の英文学』研究社、2017年5月、分担執筆 pp.251-59

〔その他〕

佐藤和哉、字幕監修 DVD教材『イギリス文学名作秘話』丸善出版、2015年6月、30分×6巻

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。